



| | |
|--------------|---|
| Title | フッサール『危機』における公式の意味の問題 |
| Author(s) | 山口, 弘多郎 |
| Citation | 大阪大学, 2018, 博士論文 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/69679 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (山口 弘多郎)

論文題名

フッサール『危機』における公式の意味の問題

論文内容の要旨

本論文は、エトムント・フッサールが『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（以下、『危機』と略記）において提示している公式の意味の問題に着目し、自然科学に対する彼の批判を捉え直すことを目的としたものである。従来、彼の自然科学批判は、科学が文化にもたらした影響への批判として、あるいは、科学の父であるガリレオ・ガリレイへの断罪として、さらには、自然科学的方法（数学的方法）への批判として受け止められてきた。ただ、いずれにしても数学と対立的であるという点で共通している。ところが、公式の意味の問題に着目し、その問題内容、その要因、その解決方法に関して考察を深めていくと、彼の自然科学批判は、必ずしも数学と対立するわけではなく、むしろ、数学との関係回復を図る融和的な側面を持っていることが見えてくる。本論文では、その側面を明らかにした。

公式の意味の問題は、『危機』第9節「ガリレイによる自然の数学化」において提示される。この第9節全体は、自然の数学化というフッサール独自の観点から、自然科学（主に物理学）の成立過程を記述したもので、その過程は、測定術から出発し、幾何学の成立を経て、公式の発見へ至る道程である。この記述の後に、公式の意味の問題が提示されるため、本論文は、その記述の検討から始まる。第一章は、なぜ自然科学の成立過程を記述しなければならないのか、その背景を概観した後（第一節）、その記述を詳細に追っている（第二節から第六節）。フッサールの記述は、幾何学の成立と物理学の成立の二段階に大別できる。前者では、測定術から幾何学が成立する過程が記述されるが、その成立の契機は二つある。技術の完全化を通じた極限形態の予示と、その形態への関心の転換である。真っ直ぐなものをより真っ直ぐなものへ、それをさらに真っ直ぐなものへ。こうした改良の反復を通して、その理想形態とも言える極限形態が示されるのだが、測定や製作などに向けていた実践的関心とその極限形態への理論的関心に転換した時、幾何学が始まる。後者では、幾何学による物の形態の数学化に導かれて、ガリレイがどのように物理学を形成したのか記述されるが、その形成は、物の感性的性質（音や匂いや、温度など）を物の形態との間にある因果性を介した間接的な数学化である。この間接的な数学化を経て、ガリレイは公式の発見へ至る。こうして記述の追跡を終えた後、自然の数学化の何が問題なのかを明らかにする（第七節）。それは、数学的方法と数学的存在の混同である。本来、公式は自然を普遍的に認識するための方法の一つにすぎないはずだが、その公式が自然の出来事を正確に予測するため、「自然は数学の言語で書かれている」というガリレイの有名な発言に代表されるような、自然それ自体が数学的であるという考え方が生じ、その結果、私たちが生きているこの世界が忘却されてしまう。フッサールは、これを「生活世界の忘却」と呼んだ。第一章の最後に、以上のような記述において、数学化という観点が果たした役割を考察する（第八節）。この観点は、数学を数学化という実践として捉え直す実践的な観点である。しかも、非数学的なものを数学的なものへ変えるという段階を含んだものである。この観点によって、数学的方法と数学的存在の混同が指摘され、学問には前学問的段階があることが示され、そこに生活世界概念が導入される。

第二章から、本論文の主題である公式の意味の問題を考察する。最初に、この問題内容とその要因を確認する（第一節）。この問題は、幾何学の算術化という実際の幾何学史で起きた出来事を背景に生じた、公式の意味の空洞化という事態を表すものである。この空洞化を引き起こす要因は、算術の技術化である。もともと作図を通して行われていた幾何学が、数式に書き換えられ、算術を通して行われるようになり、さらに、その計算技術の向上に伴って、その数式から幾何学的意味（この数式は幾何学の何を計算するものなのか）が抜け落ちるのである。次に、この空洞化の影響範囲を調べる（第二節）。意味の空洞化は、算術化された幾何学だけではなく、代数学や物理学にも起こっており、さらには、作図を用いていた古代の幾何学にもすでに生じており、数学全体に広がっている。そして、この問題に対して、フッサールがどのような方向で解決しようとしていたのかを明らかにする（第三節）。彼は、空洞化の要因である技術化を回避しない。式の計算が技術化することは当然のこととして、技術化しつつも意味の空洞化を防

止する方向で解決を図る。しかし、そのためには、公式の起源を明らかにする必要がある。つまり、公式の意味の問題を解決するためには、起源の問題に取り組みなければならない。この問題は次章で取り上げるとして、第二章の最後で（第四節）、生活世界の忘却のことを再度取り上げ、第二章の考察を踏まえて、この忘却を、公式から生活世界的意味が空洞化することとして捉え直す。これは、公式が世界の何を認識するための方法なのかがわからなくなってしまっている事態を表すものである。

第三章では、テキストを『危機』第9節から「幾何学の起源」へ移行して、そこで展開されている起源の問題を考察する。最初に、幾何学的対象の特性から、この問題設定を明らかにする（第一節）。この対象は理念的対象で、主観的なものではない。他方、この対象は数学化という作用から成立する以上、その作用主体である幾何学者という個別主観的な起源を持っている。彼の数学化作用は理念的なものではなく、主観的なものである。したがって、起源の問題とは、幾何学的対象という理念的対象が幾何学者という主観的起源からどのように成立するのか、という成立過程を問う問題として立てられる。次に、この問題に対するフッサールの考察を確認する（第二節）。彼は、この成立過程を言語表現という観点から段階的に解明する。その過程は、幾何学者当人の意識内部、その幾何学者による口頭表現、その人による文字表現という三段階に分けられる。つまり、幾何学的対象は伝達を通して成立していくのだが、この伝達の過程において、再能動化という作用が重要な役割を果たしている。これは、伝達の受け手側が、あたかも送り手側であるかのように、その送り手の表現を能動的に理解する作用である。しかし、この作用の可能性は単に表現の能動的な理解に留まらない。そこで、この作用のさらなる可能性を追求する（第三節）。フッサールは、それを「真の再能動化」と呼んでいる。これは、幾何学の前学問的素材（原素材）を発掘することで、幾何学的対象の素材が何であり、その素材がいかに数学化されて幾何学的対象になるのかを明らかにすることである。第三節で「幾何学の起源」の議論を確認し終えるので、最後に（第四節）、公式の意味の問題と起源の問題を関連付け、この真の再能動化が公式の意味の空洞化を解決する方法であることを確認する。

第四章では、『危機』第三部Aの議論に基づいて、生活世界の学の問題を取り上げる。第三章で、学問の原素材の発掘が真の再能動化において重要であることが判明したが、その原素材の本質を考察する上で、生活世界の学の問題が手掛かりとなるからである。最初に、この問題の背景を確認する（第一節）。第三部Aはカント批判から始まるので、カント批判と自然科学批判の関係を明らかにする。両者は全く異なるものではない。自然科学を基礎付けるといふ問題意識を共有している。次いで（第二節）、フッサールが、生活世界の学の問題を自然科学の部分的問題から哲学の普遍的問題へ格上げするために、生活世界と自然科学を対比しているのだから、この対比を整理する。両者は原理的に異なる。生活世界は経験可能だが、自然科学が発見する公式世界（客観的世界）は経験不可能である。このような両世界の存在様式の違いから、生活世界の二義性と呼ばれる問題が生じるため、この問題について論じる（第三節）。その後、哲学の普遍的問題としての生活世界の学がどのように実現されるのかを考察する（第四節）。生活世界には、自然科学とは異なる種類の普遍的な構造があり、それが生活世界の学の学問性を支える。その構造は、決して変わらないという不変性を備えた本質類型の構造である。最後に（第五節）、公式の意味の問題と生活世界の学の問題を関連付け、原素材が生活世界の本質類型であることを明らかにする。

第五章は、結論の章として、第一章から第四章まで行った議論を振り返る。最初に、公式の空洞化と再能動化を一つのプログラムとしてまとめる（第一節）。そして、『危機』全体の議論（つまり、超越論的現象学への道のり）における、そのプログラムの位置付けを確認する（第二節）。最後に、公式の意味の問題に着目することで見えてくることを説明する（第三節）。『危機』が学問を学問実践として捉え直す実践的観点に立ち、そこから公式の空洞化を問題視して、学問実践の主体である学者に対して、真の再能動化を要求していることから、フッサールの自然科学への批判が、学者に、自然科学的方法を真に再能動化させることを求める実践的批判であることを明らかにする。

以上のように、フッサールの自然科学批判が、世界を認識する方法として公式を適切に使用できるようにするための実践的批判であると捉えることで、この批判に、数学との関係回復を図る融和的な側面があることを示す。

論文審査の結果の要旨及び担当者

| 氏 名 (山 口 弘 多 郎) | |
|-------------------|--|
| | (職) 氏 名 |
| 論文審査担当者 | 主 査 大阪大学 教授 浜渦 辰二 副 査 大阪大学 教授 堀江 剛 副 査 関西大学 教授 三村 尚彦 |
| 論文審査の結果の要旨 | |
| 以下、本文別紙 | |

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： フッサール『危機』における公式の意味の問題

学位申請者 山口 弘多郎

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 浜渦 辰二

副査 大阪大学教授 堀江 剛

副査 関西大学教授 三村 尚彦

【論文内容の要旨】

本論文は、エトムント・フッサールが『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（以下、『危機』）において提示している「公式の意味」の問題に着目し、自然科学に対する彼の批判を捉えなおすことを目的としたものである。従来、彼の自然科学批判は、科学が文化にもたらした影響への批判として、科学の父であるガリレオ・ガリレイへの断罪として、さらには、自然科学的方法（数学的方法）への批判として受け止められてきたが、いずれも数学と対立的であるという点で共通している。ところが、『危機』第9節「ガリレイによる自然の数学化」において提示される「公式の意味」の問題に着目し考察を深めていくと、彼の自然科学批判は、むしろ、数学との関係回復を図る融和的な側面を持っていることが見えてくる。本論文は、その側面を明らかにしたものである。

第1章「自然の数学化の問題」では、フッサールが自然の数学化という観点から、自然科学（主に物理学）の成立過程を、測定術から出発し、幾何学の成立を経て、公式の発見へ至る道程として記述するのを追っていき、自然の数学化が問題なのは、数学的方法と数学的存在を混同すること、それによって私たちが前学問的に生きているこの世界すなわち「生活世界」が忘却されることにあるとしているのを確認した。

第2章「公式の意味の問題」では、幾何学の算術化および算術の技術化によって、もともと作図によって行われていた幾何学が数式に置き換えられ、算術を通して行われるようになり、その計算技術の向上に伴って、その数式から幾何学的意味が抜け落ちることが、「公式の意味」の空洞化として捉えられ、それを解決するために「生活世界的意味」という「起源」の問題に取り組まねばならないことを示した。

第3章「起源の問題」では、『危機』第9節につけられた補論である「幾何学の起源」を取り上げ、そこで「起源」の問題とは、幾何学的対象という理念的对象が幾何学者という主観的起源からどのように成立するのか、という成立過程を問うこととされるが、そのなかで、幾何学の前学問的素材（原素材）を発掘することで、幾何学的対象の素材が何であり、その素材がいかにか数学化されて幾何学的対象になるのかを明らかにすることが、「真の再能動化」と呼ばれ、これが公式の意味の空洞化を解決する方法と考えられていることを確認した。

第4章「生活世界の学の問題」では、『危機』第三部Aにおける、哲学の普遍的問題としての「生活世界の学」の議論を取り上げ、生活世界には、自然科学とは異なる種類の普遍的な構造があり、それは不変性を備えた本質類型の構造であり、「公式の意味」の問題と生活世界の学の問題を関連付け、学問の原素材が生活世界の本質類型

であることを明らかにした。

第5章「公式の意味の問題から見えてくること」では、これまでの議論を振り返り、「公式の意味」の問題に着目することで見えてくるのは、『危機』が学問を学問実践として捉え直す実践的観点に立ち、そこから公式の空洞化を問題視して、学問実践の主体である学者に対して、真の再能動化を要求していることから、フッサールの自然科学への批判が、学者に、自然科学的方法を真に再能動化させることを求める実践的批判であることを明らかにした。

以上によって、フッサールの自然科学批判が、世界を認識する方法として公式を適切に使用できるようにするための実践的批判であると捉えることで、この批判に数学との関係回復を図る融和的な側面があることを示した。

全体の分量としては、A4判横書きで123ページ、400字詰め原稿用紙に換算して、約425枚に相当する。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、フッサール『危機』の緻密なテキスト解釈にもとづきながら、これまで流布してきた解釈を問い直した研究であり、従来あまり焦点を当てられてこなかった「公式の意味」という議論に着目して、『危機』で展開される生活世界論が自然科学に何を求めるものなのかを明らかにし、フッサールの自然科学批判を、平板な対立図式（自然科学的世界 vs 生活世界）ではなく、数学・自然科学の「再能動化」という実践的な側面から捉えた点にオリジナリティが見いだされると、高い評価を受けた。

公開審査会では、先行研究の渉猟が不十分なため、フッサール現象学の全体的な流れをふまえて本研究を位置付けることが不十分で、本論文での主張にどこまでの波及効果があるのかが明らかにされていないのではないかと、といった疑問も出されたが、この疑問は、今後取り組むべき課題を示すものであり、本論文の本質的な価値を損なうものではない。本論文が、緻密な議論によって、フッサール生活世界論のこれまで顧みられなかった側面に照明を当てたという点において、評価に値するものとして意見は一致した。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。